Tsukuba Psychological Research
2006, **32**, 21-30

大学生における友人関係機能の探索的検討

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　丹野　宏昭
筑波大学人間総合科学研究科　松井　　豊

The functions of friendship in undergraduates

Hiroaki Tanno and Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to identify the functions of friendship in college students. Undergraduates (N = 266: 124 males and 142 females) were asked to imagine two kinds of friends, a high-interaction friend (HI-friend) and a low-interaction friend (LI-friend), and to respond to open questions about these images of friendship. The results indicate that: (1) most undergraduates have both HI-friends and LI-friends; (2) HI-friendships function as a comfort in their present lifestyles through 'support' and 'pleasure'; and (3) LI-friendships function in promoting a positive outlook towards the past and future. The findings suggest that HI-friendships and LI-friendships fulfill different functions for college students.

Key words: functions of friendship, high-interaction friendship, low-interaction friendship

本研究は，友人関係の重要度が高いと考えられる青年期にある大学生を対象に，「接触頻度の高い友人関係」と「接触頻度は低いが親密な友人関係」とが，大学生の精神的健康や社会的発達といった広義の内的適応に対して果たしている友人関係機能を探索的に検討する。

友人関係の重要性

われわれは，人生でたくさんの仲間と出会い，多くの友人関係を形成する。友人関係は，われわれの生活において重要な機能を果たしており，不可欠な対人関係のひとつである。従来の友人関係研究は，適応的な友人関係を形成することが，個人の内的適応の促進につながることを繰り返し明らかにしている。

例えば，高倉・新屋・平良（1995）は，大学生の友人関係満足感と生活全体の満足感との間に正の相関があり，友人関係満足感と抑うつとの間に負の相関があることを明らかにした。鈴木（2002）も高倉ら（1995）と同様の結果を示し，大学生の友人関係満足感は，快感情経験や自尊感情とも正の相関があることを明らかにした。吉田・橋本・安藤・植村（1999）や植村・小川・吉田（2001）は，大学生の大学への適応に関する研究の中で，友人関係親密度と学習への取り組みとの間に正の相関があることを明らかにした。中野・永江（1996）は，中学生から大学生までを対象に調査を行い，友人関係の確立の度合いと孤独感との間に負の相関がみられ，孤独感と自己実現との間に負の相関があることを明らかにした。

このように，友人関係は個人の内的適応を促進する機能を果たしている。特に青年期は，他の年代以上に友人関係が自己概念の形成や精神的安定といった内的適応の促進に果たしている役割の重要度が高いと指摘されている（岡田，1993，1995）。本研究では，友人関係が個人の広義の内的適応に与える影響や，内的適応に果たしている役割を「友人関係機能」と呼ぶ。また，本研究では，広義の内的適応を促進する友人関係の行動・期待・感情などの下位成分を「友人関係機能成分」と呼び，友人関係機能成

分を網羅的にとらえることによって，青年の友人関係機能を探索的に検討していく。

青年期の友人関係の機能

従来の青年期の友人関係研究では，友人関係のつきあい方や期待などの側面に着目した研究や，友情・友人概念の構造を検討した研究が多く，友人関係機能を検討した研究は少ない。また，それぞれの研究で別個の友人関係機能に着目した研究が多く（例えばソーシャル・サポート研究），網羅的に友人関係機能を把握した研究は少ない。以下，友人関係に関する先行研究から，青年の友人関係機能成分を推定していく。

（1）友人関係のつきあい方や行動に着目した研究

友人関係におけるつきあい方や行動に着目している研究知見から，友人関係機能成分を推定する。

内閣府政策統括官（2004）や総務庁青少年対策本部（1991）の青年を対象とした調査結果は，青年が悩みや心配ごとの相談相手として，親や教師ではなく，信頼している友人を選択していることを明らかにしている。榎本（1999）や落合・佐藤（1996）は，中学生から大学生までを対象とした調査を行い，青年後期になると「自己を開示し，積極的に理解しあおうとするつきあい方」が増えることを明らかにしている。自己開示研究を概観した榎本（1997）は，青年の友人に対する相談や自己開示が，精神的安定や自己の再把握を促進につながると論じている。以上の研究や論考から，「友人との自己開示・相談」や「相互に理解している感覚」は，青年の精神的安定などの内的適応を促進する友人関係機能を果たしていると推定される。

一方で，現代青年の友人関係には，「自己開示と相互理解」を基盤とした深刻なつきあいの側面ばかりではなく，「娯楽的なつきあい」の側面も存在する。岡田（1993）は，大学生を対象とした調査から，友人とのつきあい方として「群れ志向」「対人退却」「やさしさ志向」の3種類の友人との関わり方を抽出している。この結果から岡田（1993）は，現代青年の友人関係の特徴として，「深い自己を開示しあうつきあい方」ではなく，「友人関係場面で深刻さを回避し，楽しさを求め，友人といつも一緒にいようとするつきあい方」を求めている青年も多いと論じている。内閣府政策統括官（2004）の調査においては，青年の休日の過ごし方でもっとも多いのは，「友人と一緒に遊ぶ」ことが明らかとなっている。岡田（1993）や内閣府政策統括官（2004）の調査結果からみると，友人関係は「娯楽性の強い対人関係」であると考えられる。青年は，友人との娯楽的なつきあいを通じて，ストレスを解消し，充実感や生きがいを獲得していると推定される。友人関係の娯楽的なつきあいも，青年の内的適応を促進する友人関係機能を果たしていると推定される。

さらに，友人関係における互恵的な支援もまた，青年の内的適応において重要であると考えられる。ソーシャル・サポート研究を概観した浦（1992）は，友人関係で交換される物理的・心理的な支援が青年のストレスを緩衝し，精神的健康を促進すると論じている。福岡・橋本（1997）は，大学新入生を対象とした調査から，友人関係で交換されるソーシャル・サポートが大学新入生のストレスを軽減していることを明らかにしている。このように，友人との間で交換される支援は，青年の内的適応を促進する友人関係機能を果たしていると推定される。

以上の研究から，青年の友人関係機能成分として「相談・自己開示」「相互理解」「娯楽性」「支援性」が存在すると推定される。

（2）友人関係の期待や欲求を分析した研究

友人関係における期待や欲求を分析した研究知見から，友人関係機能成分を推定する。

榎本（2000）は，中学生から大学生までを対象とした質問紙調査を行い，友人関係における欲求として，友人と遊ぶことや娯楽的なつきあいを望む「親和欲求」と，友人との行動や趣味の類似を望む「同調欲求」と，友人と互いの個性を尊重することを望む「相互尊重欲求」との3因子を抽出した。

友人関係の役割行動と親密化過程との関連を検討した下斗米（1999）は，大学生を対象とした調査から，友人関係において期待される役割行動として，「支援性」「自律性」「類似性」「娯楽性」「近接性」「力動性」の6つを挙げている。和田（1993，1996）は，大学生を対象とした調査において，友人関係で期待されることとして，「協力」「情報」「類似」「自己向上」「敏感さ」「共行動」「真正さ」「自己開示」「尊重」「相互依存」の10領域を挙げている。また，和田（1993）は，大学生の友人関係に対する期待の性差を検討し，男子大学生が友人関係に「共行動」を強く望み，女子大学生が友人関係に「相互依存」と「自己開示」を強く望んでいることを明らかにした。

岡田（1993）は，大学生を対象に，「友人と仲のよい理由」を調査したところ，男女ともに「気が合うから」といった，性格や趣味の類似の理由が最も多いことを明らかにしている。Duck（1991）や下斗米（2004）は，友人との類似点を発見すること

で，合意的妥当化がなされ不安が解消されるために，青年が友人に対して「類似性」を望んでいると論じている。

また，青年は友人関係に「安心感」も求めていることが明らかになっている。佐藤（1995）は，高校生女子が友人グループに所属する理由を調査したところ，「まわりから浮きたくない，ひとりでいる人だと思われたくないという気持ち」と，「何かあったときに支えてくれる人が近くにいる安心を求める気持ち」の２種類の気持ちによって友人グループに所属していることを明らかにした。青年期の友人関係研究を概観した松井（1990，1996）や宮下（1995）は，青年期の友人の機能・意義の１つとして「友人との悩みや不安の共有から安心感の取得」が挙げられると論じている。以上の研究や論考から，青年は友人関係から安心感を得て，精神的な安定を保っていると推定される。

以上より，青年は友人関係に対して「支援性」「娯楽性」「自己開示」「類似性」「安心」を期待していると考えられる。これらの期待にあった友人関係を形成することで，その関係が個人の内的適応を促進する機能を果たしていると推定される。

（３）友人概念・友情を分析した研究

友人概念や友情を構成する側面を広く探索的に抽出し，友人関係の特徴や構造について分析した研究知見から，友人関係機能成分を推定する。

LaGaipa（1977）は，青年を対象とした調査から，友人概念を構成する因子として，「信頼」「類似性」「共感的理解」「援助行動」「受容」「肯定的関心」「人格的強さ」「自己開示」の８因子を抽出している。Davis & Todd（1985）は，青年を対象とした調査から，友人関係の概念を構成する成分として，「尊敬」「信頼」「信任」「相互理解」「支援性」「娯楽性」「受容」「自発性」の８因子を抽出している。Steck et al.（1982）は，大学生を対象とした調査を行い，友情と好意・愛情との比較から，友情の特徴が「相手への信頼の強さ」であることを明らかにした。柴田（2000）は，友人との「尊敬・信頼」を基盤とした関係から，他者への信頼感や人間関係のルールを学び，社会的に発達していくと論じている。

これらの研究知見から，青年の友人関係機能成分として「尊敬・信頼」「類似性」「相互理解」「支援性」などが存在すると推定される。

以上の先行研究の知見から推定された友人関係機能成分を列挙すると，青年の友人関係機能成分として「相談・自己開示」「相互理解」「娯楽性」「支援性」「類似性」「安心」「尊敬・信頼」を含むと考えられる（Table１）。これらの友人関係機能成分を網羅的に把握することで，友人関係が青年の内的適応に果たしている機能を推定し，整理できると期待される。

接触頻度は低いが親密な友人関係

しかし，従来の友人関係研究では「接触頻度の高い友人関係」に重点が置かれている。前述の友人関係機能成分は，いずれも「接触頻度の高い親密な友人関係（High Interaction: HI友人関係）」における成分である。しかし，青年期後期となる大学生以降，HI友人関係だけではなく，「接触頻度は低いが親密な友人関係（Low Interaction: LI友人関係）」もまた形成される。タイガー魔法瓶（2000）が20代から60代までの成人女性を対象に行った調査によると，成人女性の友人で，もっとも多いのは学生時代の友人であり，これらの友人の約半数は，めったに会うことができていない友人であることが明らかにされている。

青年期の友人関係について，藤崎（1998）は，高校生（青年期中期ごろ）までの友人関係のほとんどが学校場面で形成されるため，高校生までは，物理的な距離が近く，生活空間の大部分を共有したHI友人関係を多く形成すると論じている。一方で，和

Table 1　先行研究で指摘された主な友人関係機能成分

構成成分	代表的な研究
相談・自己開示	榎本(1997)，榎本(1999，2000)，LaGaipa(1977)，落合・佐藤(1996)，和田(1993，1996)
相互理解	榎本(1999，2000)，LaGaipa(1977)，落合・佐藤(1996)，柴橋(2000)
娯楽性	Davis & Todd(1985)，榎本(2000)，岡田(1993)，下斗米(1999)
支援性	Duck(1991)，福岡・橋本(1997)，LaGaipa(1977)，下斗米(1999)
類似性	Duck(1991)，榎本(2000)，LaGaipa(1977)，岡田(1993)，下斗米(1999，2004)，和田(1993，1996)
安心	松井(1990，1996)，宮下(1995)，柴田(2000)
尊敬・信頼	Davis & Todd(1985)，LaGaipa(1977)，水野(2000)，Steck et al.(1982)

田（2001）は大学生を対象とした調査から，大学生になると，大学内で形成されるHI友人のほかに，「出身地の旧友」のようなLI友人関係も多く形成するようになることを確認している。

Connidis & Davis（1992）は，高齢者を対象とした調査を行い，高齢者の友人関係を「活動の共有・娯楽の相棒（Companions）」と「心から信頼する相手（Confidants）」の2つに分類した。Companionsはふだんの生活で，一緒に趣味の活動に興じたり，おしゃべりなどのコミュニケーションを楽しむ関係であると定義されている。Confidantsは，活動ではなく信頼や情緒的な結びつきを中心とした関係であると定義されている。Companionsはふだんの接触をともなうHI友人，Confidantsは接触が無くとも親密な関係であるLI友人と対応していると考えられる。

Connidis & Davis（1992）は，Companionsがふだんの生活において，活動の共有やコミュニケーションを通じて充実感や生きがいを促進する機能を果たし，Confidantsが自分の人生の位置づけや過去の回顧の上で欠かせず，自尊心や精神的健康を促進する機能を果たしていると論じている。この知見をふまえると，HI友人関係だけでなく，LI友人関係もまた，個人の内的促進に重要な機能を果たしていると推定される。

HI友人だけではなく，LI友人もまた，高齢者の内的適応の促進に重要な機能を果たしていることは，藤田（1999）や柏尾（2000）の研究からも明らかになっている。藤田（1999）は，高齢者の過去の友人との思い出が，高齢者の自尊心や感謝心などと正の関連があることを明らかにした。高齢者の時間的展望と友人関係との関連について調査した柏尾（2000）は，適切な友人関係を有していることと，過去や未来の肯定的な時間的展望と，個人の充実感との間に正の関連があることを明らかにした。この結果から柏尾（2000）は，適切な友人関係をもつことで，肯定的な時間的展望を構築することができ，高齢者の内的適応が促進されていると結論している。

以上の藤田（1999）や柏尾（2000）の高齢者を対象とした知見が大学生に当てはめることができるとすると，大学生のLI友人関係もまた，肯定的な時間的展望の構築を促進し，内的適応を促進する機能を果たしている可能性が推定される。

以上の議論より，青年期後期の大学生の友人関係においては，HI友人関係だけではなく，LI友人関係もまた，個人の広義の内的適応を促進する重要な機能を果たしていると推定される。さらに，HI友人関係とLI友人関係とでは，大学生の内的適応に果たす機能が異なっていると推定される。しかし，従来の青年期の友人関係研究では，LI友人関係機能について検討されてきた知見はみられない。LI友人関係機能は従来の研究から説明できず，青年期の友人関係機能についての議論は不十分であると考えられる。

目　的

これまでの友人関係機能研究では，特定の友人関係機能や機能成分に着目し，友人関係機能について網羅的に検討されてこなかった。また，友人関係をHI友人関係とLI友人関係に分類して捉えると，従来の研究においてはHI友人関係の機能ばかり検討されてきたが，LI友人関係の機能に関しては検討されてこなかった。このHI友人関係とLI友人関係とは，大学生の精神的健康や自尊感情といった広義の内的適応に果たしている機能が異なっていると考えられる。大学生の友人関係機能を明らかにする上で，従来の研究で主に扱ってきたHI友人関係の機能だけではなく，LI友人関係の機能に関しても検討する必要があると考えられる。

本研究は，大学生のHI友人関係とLI友人関係の友人関係機能成分を網羅的に把握し，両者の友人関係機能成分を比較することで，2つの友人関係が大学生の適応に果たしている機能を探索的に推定することを目的とする。

方　法

予備調査

茨城県の国立大学に所属する2～4年生の大学生15名および大学院生5名（男性10名，女性10名，平均年齢21.1歳）を対象とした半構造化面接を行った。HI友人とLI友人それぞれの想起を求め，想起される友人の有無について回答を求めた。さらに，想起された友人とのつきあい方や友人との関係で感じていることなどについて自由に回答するよう求めた。

結果，調査対象者全員がHI友人とLI友人のどちらもいると回答した。HI友人関係とLI友人関係の捉え方に関する回答は，12カテゴリーに整理された（Table 2）。

調査対象

茨城県の国立大学，神奈川県の私立大学に所属する1～4年生の大学生273名を調査対象とした。全

調査対象のうち，回答に不備のあった10名の回答者を除き，263名（男性121名，女性142名）を有効回答者とした。有効回答者の平均年齢は19.6歳であった。有効回答者の学年は，1年生86名，2年生87名，3年生74名，4年生16名であった。

手続き

個別配布個別回収および集団配布集団回収により，無記名・個別記入形式の質問紙調査を実施した。結果のフィードバックを希望する回答者には，質問紙に記載したメールアドレスまで申し出るように求めたが，フィードバックを希望する回答者はいなかった。

所要時間は10分程度であった。質問紙調査の実施前に，調査の目的，プライバシーの保護，調査方法，調査結果の取り扱いに関して説明し，承諾した場合のみ調査に回答するように求めた。

調査内容

本研究の分析に用いた項目のみ示す。

a. フェイスシート

回答者の性別，年齢，学年について回答を求めた。

b. 友人の想定・友人の有無

調査対象者には，以下の教示文により，具体的に2種類の友人1名ずつの想定を求めた。HI友人は「『ふだんから会って話したり，遊んだりなど一緒になんらかの活動をすることが多く，とても信頼できる同性の友人』として想定される人物はいますか」と教示し，想定を求めた。LI友人は「『ふだんから会って話したり，遊んだりなど一緒になんらかの活動をすることは少ないが，とても信頼できる同性の友人』として想定される人物はいますか」と教示し，想定を求めた。想定される人物が「いる」か「いない」かの2件法で回答を求めた。想定される友人が「いない」場合，以降の設問の回答を求めず，分析対象からも除外した。

c. 親密さ

「想定された人物とは，どれくらい親しいといえますか」と教示し，想定された2種類の友人との親密さについて，「1．親しくない」「2．やや親しい」「3．親しい」「4．かなり親しい」「5．とても親しい」の5件法でそれぞれ回答を求めた。

d. 友人関係の心理的位置づけ

友人関係機能成分を抽出するために，本研究では，「友人はどのような存在であるか」という大学生にとっての友人の心理的位置づけを尋ねた。

「想定された友人はどのような存在だといえますか？ご自由にお書きください」と教示し，想定されたHI友人関係とLI友人関係の友人関係の心理的位置づけについて，それぞれ自由記述の回答を求めた。

結　果

想定された友人の有無

全有効回答者のうち，HI友人が「いる」と回答したのは263名中221名（84.0%），LI友人が「いる」と回答したのは263名中229名（87.1%）であった。HI友人LI友人のいずれも「いる」と回答したのは263名中196名（74.5%）であった。いずれも「いない」と回答したのは263名中3名（1.1%）であり，以降の分析からは除外した。

Table 2　予備調査で得られた友人関係機能成分のカテゴリー

カテゴリー	項目例
相談・自己開示	何でも相談できる。何でも話し合える。
相互理解	お互いに相手のことをよく理解している。
娯楽性	一緒にいると楽しい。遊び仲間。
支援性	困ったときに助け合える。ふだんからよく助けられる。
類似性	考え方や趣味が似ている。
安心	安心感を感じる。ほっとする。
尊敬・信頼	相手を尊敬している。あこがれている。
気楽さ	気楽につきあえる。自分らしくいられる。
重要性	重要である。かけがえのない存在。
家族性	家族のような存在。きょうだいのような関係。
関係継続展望	これからも長くつきあっていきたい。関係がきれなそう。
情緒的結びつき	心が通じ合っている。相手が悲しいと自分も悲しい。

HI友人・LI友人の親密さ

HI友人とLI友人のいずれも「いる」と回答した回答者において，友人の種類と独立変数，親密さを従属変数とする対応のあるt検定を行った結果，HI友人とLI友人との間に有意な差はみられなかった(Table 3)。どちらの友人関係においても親密さは4以上を示しており，大学生はHI友人関係とLI友人関係のいずれも「かなり親しい関係」と捉えていた。

友人関係機能成分の抽出

友人関係の心理的位置づけから友人関係機能成分が抽出された。友人関係の位置づけについての自由記述は，筆者により記述を数文からなる分析単位に区分した。得られた自由記述の分析単位は，HI友人が226個，LI友人が232個となった。予備調査で得られた回答から作成した分類表（Table 2）をもとに心理学専攻の大学院生2名によって自由記述の分類を行った。2名の分類による一致率は89.5%であった。2名の意見が不一致であった場合，筆者を加えた3名で協議し，再度分類を行った。分類中の協議の結果，「ライバル性（回答例：切磋琢磨しあえる）」のカテゴリーを追加することが妥当であると判断されたため，分類表に「ライバル性」のカテゴリーを加え，再度分類を行った。最終的なカテゴリーと得られた回答数をTable 4に示す。各カテゴリーに当てはまる回答をした人数の割合をTable 5に示す。

Table 3　HI友人とLI友人の親密さ

(N＝196)	HI友人	LI友人
平均	4.23	4.16
標準偏差	0.77	0.91

$t(1, 195) = 0.85$, *n.s.*, $r = .17$

友人関係機能成分の構造

HI友人関係およびLI友人関係の機能成分構造を検討するために，13個の分類カテゴリーをアイテムカテゴリー，性別とHI友人・LI友人を組み合わせた4パターンをサンプルとした，クロス表に基づく数量化理論第Ⅲ類（双対尺度法）による分析を行った（Fig. 1）。分析の結果，固有値は成分1が.085，成分2が.023であった。

Table 4　最終的な友人関係機能成分のカテゴリーと回答数

カテゴリー	項目例	回答率(%) HI友人	LI友人
相談・自己開示	何でも相談できる。何でも話し合える。	11.5	12.5
相互理解	お互いに相手のことをよく理解している。	2.2	5.2
娯楽性	一緒にいると楽しい。遊び仲間。	8.8	5.2
支援性	困ったときに助け合える。ふだんからよく助けられる。	7.1	4.7
類似性	考え方や趣味が似ている。	4.0	3.9
安心	安心感を感じる。ほっとする。	5.8	7.8
尊敬・信頼	相手を尊敬している。あこがれている。	5.3	4.7
気楽さ	気楽につきあえる。自分らしくいられる。	12.4	9.9
重要性	重要である。かけがえのない存在。	23.0	13.8
家族性	家族のような存在。きょうだいのような関係。	5.8	6.9
関係継続展望	これからも長くつきあっていきたい。関係がきれなそう。	2.7	10.3
情緒的結びつき	心が通じ合っている。相手が悲しいと自分も悲しい。	8.4	13.4
ライバル性	負けたくない。切磋琢磨しあえる。	3.1	1.7

Table 5　各カテゴリーにあてはまる回答をした回答者の割合（単位%）

	相談・開示	相互理解	娯楽性	支援性	類似性	安心	尊敬・信頼	気楽さ	重要性	家族性	関係継続	情緒	ライバル
HI男(N＝67)	6.3	2.1	12.5	8.3	4.2	4.2	6.3	12.5	31.3	10.4	0.0	8.3	6.3
LI男(N＝69)	12.3	5.3	7.0	8.8	3.5	3.5	7.0	15.8	17.5	5.3	10.5	12.3	1.8
HI女(N＝111)	25.8	5.4	14.0	10.8	5.4	11.8	8.6	23.7	31.2	7.5	7.5	16.1	4.3
LI女(N＝112)	20.2	8.7	6.7	3.9	5.8	14.4	4.8	9.6	16.4	12.5	16.4	22.1	2.9

男子大学生のHI友人群は図の左下に布置され，近くに「重要性」「娯楽性」「家族性」「ライバル性」が布置された。男子大学生のLI友人群は図の右上に布置され，近くに「関係継続展望」「気楽さ」「相談・自己開示」が布置された。女子大学生のHI友人群は図の左上に布置され，近くに「気楽さ」「重要性」「娯楽性」「支援性」「相談・自己開示」が布置された。女子大学生のLI友人群は図の右下に布置され，近くに「関係継続展望」「情緒的結びつき」「家族性」が布置された。

考　察

大学生のHI友人・LI友人の有無

本研究から，HI友人が「いる」と回答した回答者も，LI友人が「いる」と回答した回答者もそれぞれ8割以上いた。さらに，HI友人とLI友人のいずれも「いる」と回答した回答者も7割以上いた。これらの結果から，大学生の多くはHI友人とLI友人両方もしくは片方との関係を有していることが明らかとなった。また，HI友人関係とLI友人関係とのどちらも親密であると捉えられていた。

以上より，大学生にとって，HI友人関係だけではなく，LI友人関係もまた重要な友人関係であることが明らかになった。大学生の友人関係を検討する上で，HI友人関係だけではなく，LI友人関係に関しても検討していく必要性が示唆された。

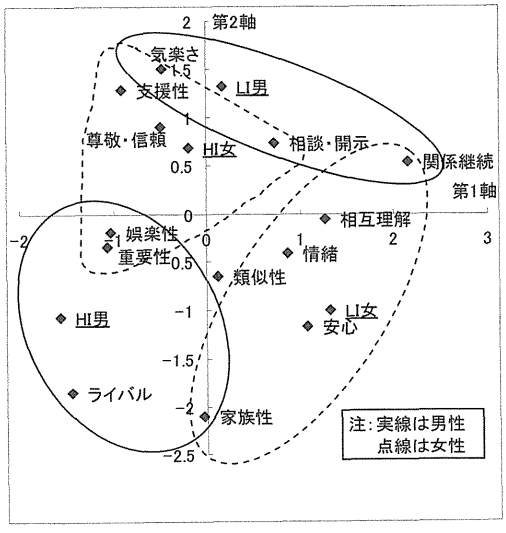

Fig. 1　友人関係機能成分のプロット図

抽出された友人関係機能成分

先行研究から推定された友人関係機能成分（Table 1）の他に，「気楽さ」「重要性」「家族性」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「ライバル性」の6種の友人関係機能成分が新たに抽出された。特に「家族性」「情緒的結びつき」「関係継続展望」は，HI友人関係と比較すると，LI友人関係において強い友人関係機能成分であり（Table 4），大学生のLI友人関係に特徴的な友人関係機能成分であると考えられる。

従来の友人関係機能研究では，友人関係における行動・感情・期待などの特定の側面に重点をおいて検討したり，論考にとどまっているものがほとんどであった。新たに発見された友人関係機能成分は，行動・感情ではなく，友人関係において強く期待されるものでもないと考えられる。本研究は，大学生の友人関係機能の全体像を探索的に把握するために，友人関係機能成分HI友人関係だけではなく，LI友人関係の友人関係機能についても検討した。また，面接および自由記述調査により，それぞれの友人関係機能成分を，細分化して広く抽出した。そのため，これらの友人関係機能成分が新たに抽出されたと考えられる。

その他の「安心」「相互理解」「娯楽性」「尊敬・信頼」「類似性」「相談・自己開示」「支援性」に関しては，Table 1に挙げたものと同一と考えられる友人関係機能成分が抽出された。「相互理解」「類似性」に関しては，HI友人とLI友人いずれにおいても回答数が少なかった。大学生の友人関係における6種類の役割期待と親密化過程の関連について調査した下斗米（1999）によると，いずれの親密段階においても，「類似性」の期待度がもっとも低かった。下斗米（1999）はこの結果から，類似性が，接触機会の増大や，合意的妥当化の源泉として重要な要因ではあるものの，意識的に期待されているものではないと考察している。このことから，現代大学生は友人関係において「相手と理解しあう」「相手と類似点をみつける」といったことを意識していないと推定される。「相互理解」も「類似性」と同様に，ふだんの生活では意識されにくい要因である可能性がある。これらの友人関係機能成分が，大学生の友人関係で意識されていないだけであるかどうか，また，内的適応を促進する機能を果たしているかどうかは，今後の研究による検討が必要であろう。

友人関係機能成分と友人関係機能の推定

自由記述回答の割合および数量化理論第Ⅲ類の分析結果をみると，男子大学生のHI友人関係には

「重要性が高く，楽しさを共有し，家族のようであると感じ，互いに切磋琢磨している」といった友人関係機能成分がみられた。女子大学生のHI友人関係には「気楽につきあうことができて，重要性が高く，楽しみを共有し，互いに助け合い，何でも話せる」といった友人関係機能成分がみられた。一方，男子大学生のLI友人関係には「長期的な関係を予期または希望しており，何でも話せる」といった友人関係機能成分がみられ，女子大学生のLI友人関係には「長期的な関係を予期または希望しており，情緒的なつながりが強く，家族のような存在である」といった友人関係機能成分がみられた。

以上の結果から，友人関係機能を推定すると，HI友人関係は，男子大学生においては「遊び仲間」「ライバル」，女子大学生においては「遊び仲間」「気楽に支援しあえる・相談相手」といった，現在の生活の共有による友人関係機能を果たしていると考えられる。青年期は「遊び仲間」「ライバル」の存在により，ふだんの生活が充実したものとなり，「気楽に支援しあえる・相談相手」の存在によって，生活を快適に送れるようになっていると推定される。

他方，LI友人関係は，男子大学生の「長期的な相談相手・語り合う仲間」，女子大学生の「長期的な情緒的支え」といった，現在だけでなく長い人生に渡って精神的な支柱となる友人関係機能が果たされていると推定される。大学生にとって，「人生を一緒に歩んでいく仲間」であるLI友人の存在が，不安を低減し，大学生の内的適応を促進する友人関係機能を果たしていると推定される。

また，LI友人と共有する過去を語り合うことで，自分の人生を肯定的に位置づけることができ，大学生の内的適応が促進されていると推定される。このように，大学生のLI友人関係は，未来と過去の両方向の時間的展望を肯定的なものに構築する友人関係機能を果たしていると考えられる。柏尾（2000）は高齢者の調査から，適切な友人関係が肯定的な時間的展望の構築を促進し，その結果，個人の内的適応を促進することを明らかにした。本研究結果より，柏尾（2000）が明らかにした時間的展望に関連した友人関係機能が，高齢者だけではなく，大学生においても果たされているとの示唆が得られた。

以上のように，HI友人関係とLI友人関係とでは共有している時点や生活空間の異なりによって，それぞれが内的適応に果たしている友人関係機能が異なっていると推定された。本研究より，大学生の友人関係機能を検討する上で，現時点の生活空間を共有するHI友人関係だけではなく，過去や未来を共有するLI友人関係に関しても扱っていく必要性があると示された。

性差について

男子大学生はLI友人関係が相談相手としての友人関係機能を果たし，女子大学生はHI友人関係が相談相手としての友人関係機能を果たしている点で，性差傾向がみられた。女子大学生が男子大学生よりもHI友人に対して自己開示を望んでいることについては和田（1993）の結果と一致している。Derlega, Petronio, Metts & Margulis（1999）は自己開示研究を概観し，自己開示の性差について，男性は身近な存在に対して「弱みを見せることが不適切」であり，女性は身近な存在に対して「自己開示することを求められる」といった性役割意識が影響していると論じている。本研究において明らかにされた，HI友人関係とLI友人関係の2種類の友人関係を比較すると，男性はHI友人関係ではなく，身近にいないLI友人関係が自己開示の友人関係機能成分を有していると推定される。

今後の課題

本研究結果より，HI友人関係とLI友人関係との心理的位置づけを把握し，整理することで，それぞれの友人関係機能成分を抽出し，友人関係機能についての示唆を得た。しかし，以下の点が今後の課題として挙げられる。

第1に，知見の一般性の問題である。本研究では自由記述の回答を，各調査対象者が，それぞれのカテゴリーにあてはまる記述を回答したかどうかを調べ，各群全体の人数における回答した人数の割合を求めた。本研究の知見と他の研究方法で得られた知見との対応を確認し，一般化できるものであるかどうか，確認することが必要である。

第2に，本研究結果は，友人関係の心理的位置づけを把握し，友人関係機能成分として抽出し，友人関係機能を推定したものであり，友人関係機能を直接捉えたものではないという点である。2種類の友人関係と大学生の内的適応との関連性を検討するなど，具体的な友人関係機能について整理する必要がある。

引用文献

Connidis, I.A. & Davis, L. (1992). "Confidants & Companions: Choices in Later Life", *The Journal of Gerontrogy*, **47**, 115-129.

Davis, K.E. & Todd, M. (1985). Assesing friendship: Prototypes, Paradigm cases, and relationship descliption, in S.W. Duck & D. Palman (eds.), *Understanding Personal Relationships*, SAGE: London., pp.34-35.

Derlega, V.J., Petronio, S., Metts, S. & Margulis, S.T. (1999). 人が心を開くとき・閉ざすとき―自己開示の心理学　斎藤勇（監訳）　金子書房

Duck, S. (1991). *Friends, for life: The Psychology of personal relationships*, Brighton; Harvester Press.（仁平義明（訳）(1995). フレンズ スキル社会の人間関係学 福村出版）

榎本淳子（1999）. 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, **47**, 180-190.

榎本淳子（2000）. 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究, **48**, 444-453.

榎本博明（1997）. 自己開示の心理学的研究　北大路書房.

藤崎宏子（1998）. 高齢者・家族・社会的ネットワーク　現代家族問題シリーズ４　培風館.

藤田綾子（1999）. 高齢者の対人関係ネットワーク　高木修・土田昭司（編）対人行動の社会心理学　シリーズ21世紀の社会心理学Ⅰ　pp.118-125.

福岡欣治・橋本　宰（1997）. 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果　心理学研究, **68**, 403-409.

柏尾眞律子（2000）. 高齢者の時間的展望　藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（編著）青年期以降の発達心理学　自分らしく生き，老いるために　北大路書房　pp.137-160.

La Gaipa, J.J., (1977). Testing a multidimensional approach to friendship. In S. Duck. (ed.), Theory and Practice in Interpersonal attraction. Academic Press. Pp.249-270.

松井　豊（1990）. 友人関係の機能　斉藤耕二・菊池章夫（編著）社会化の心理学ハンドブック　人間形成と社会と文化　川島書店　pp.283-296.

松井　豊（1996）. 親離れと異性との親密な関係の成立まで　斎藤誠一（編）青年期の人間関係　人間関係の発達心理学４　培風館　pp.19-54.

宮下一博（1995）. 青年期の同世代関係　落合良行・斎藤耕二（編）講座生涯発達心理学第４巻　金子書房　pp.155-184.

内閣府政策統括官（編）(2004). 世界の青年との比較からみた日本の青年　第７回世界青年意識調査報告書.

中野綾子・永江誠司（1996）. 青年期における孤独感及び孤独感の受容と精神的健康　福岡教育大学紀要, **45**, 309-321.

落合良行・佐藤有耕（1996）. 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, **44**, 55-65.

岡田　努（1993）. 青年期における友人関係に関する考察　青年心理学研究, **5**, 43-55.

岡田　努（1995）. 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究, **43**, 354-363.

佐藤有耕（1995）. 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析　神戸大学発達科学研究紀要, **3**, 11-20.

柴田利男（2000）. 青年期の対人関係　藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（編著）青年期以降の発達心理学　自分らしく生き，老いるために　第５章　pp.56-74.

下斗米淳（1999）. 対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化に関する研究　専修人文論集, **64**, 1-32.

下斗米淳（2004）. 現代青年における対人ネットワークの拡張可能性について：準拠集団としての道具的機能評価からの検討　専修人文論集, **75**, 87-116.

総務庁青少年対策本部（編）(1991).「青少年の友人関係に関する国際比較調査」報告書　青少年の友人関係.

Steck, L., Levitan, D., McLane, D., Kelley, H.H. (1982). Care, Need, and Conceptions of Love, *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 481-491.

鈴木有美（2002）. 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康－共感性およびストレス対処との関連－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, **49**, 145-155.

高倉　実・新屋信雄・平良一彦（1995）. 大学生のQuality of Lifeと精神的健康について－生活満足度尺度の作成－　学校保健研究, **37**, 414-422.

タイガー魔法瓶（2000）. 女性に聞く「平成交遊録」

植村善太郎・小川一美・吉田俊和（2001）. 大学生の適応過程に関する縦断的研究（2）－大学生

の学習への取り組み，および大学生活満足感に関連する要因の検討－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**48**，29-43.

吉田俊和・橋本 剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**46**，75-98.

和田 実 (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究，**8**，67-75.

和田 実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究，**67**，232-237.

和田 実 (2001). 性・物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究，**72**，186-194.

（受稿3月22日：受理5月18日）